

1 これまでの取組

平成15年度は、アクション・リサーチを使った授業改善プロジェクトについて、参加者は一定の評価をしており、目標はほぼ達成されたと考えられる。基本的には、この方法を踏襲したうえで、改善を図る。

(1) 成果と課題

英語を教えることを喜びとし、生徒の良好な人間関係を気づきながら、授業に対する深い洞察をもととする「教育的人間力」を高めることに効果があった。この点については、引き続き参加者の自主的取組や意欲を大切にしながら、互いに高めあえる研修の雰囲気作りに努めていきたい。英語運用能力の向上については、研修期間内では十分な向上が見られなかったが、生涯に渡って英語力の向上に努めるという意欲を高めることができていた。これは、当初のねらいどおりであり、今後も継続する。

「英語教授力」では、教科教育の専門的な知識の向上ということが課題であった。集合研修の講演等の充実を図るとともに、アクション・リサーチを使った、実践的な職場内研修の中で高めていけるよう工夫をしたい。

(2) 平成16年度に向けての改善点

アクション・リサーチへの専門的な支援の充実
メーリングリストの見直し
オリエンテーションの充実
リサーチ初期段階の支援の充実
夏期集合研修プログラムの見直し（実技研修の改善、実践発表の導入）
教科教育の専門的知識の向上
授業での英語使用についての働きかけ
自己変容、自己の能力開発の喜びを実感できる雰囲気作り

2 平成16年度の具体的な改善点

(1) メンタリングの導入

指導主事のためのコーチングワークショップの実施
高校における経験教員のメンター依頼

(2) メーリングリストの改善

メーリングリストは、全受講者を一つのリストに登録することとし、情報交換、意見交換の場として活用する。

(3) 研修プログラムの改善

年間のプロジェクトの流れを変えた。1年間をAR1とAR2に分けた。
オリエンテーションで、年間のプロジェクトの流れを明確に示した。
中間報告では、ポスターセッション形式を用いて、より多くの参加者と意見交換・情報交換ができるようにした。
リサーチグループの編成をテーマ別から、職場別・地域別に変更した。
報告会に緊張感と「正統性」を持たせるために、指導主事を配した研究発表形式にした。

3 研修の評価 - 自己評価のまとめより

(1) 全体の傾向

		平成16年度	設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的 人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	2.95	3.12	3.04	3.04
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.14	3.20	3.17	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.00	3.12	3.07	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	3.00	2.96	2.98	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.86	3.04	2.96	
2 英語 運用 能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.43	2.24	<u>2.33</u>	2.70
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.62	2.64	2.63	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.57	2.80	2.70	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.67	2.92	2.80	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.10	3.00	3.04	
3 英語 教授 力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	3.05	3.16	3.11	2.84
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。	2.71	2.92	2.83	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	2.76	3.12	2.96	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.48	2.43	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.81	2.96	2.89	
平均			2.80	2.91	2.86	

		平成15年度	設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的 人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.19	2.95	3.07	2.98
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.10	3.03	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.12	3.00	3.06	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	2.90	2.92	2.91	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.76	2.82	2.79	
2 英語 運用 能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.31	2.26	<u>2.28</u>	2.67
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.57	2.44	<u>2.51</u>	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.71	2.72	2.72	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.69	3.03	2.85	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.02	3.00	3.01	
3 英語 教授 力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	2.98	2.90	2.94	2.77
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。	2.76	2.77	2.77	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	2.86	2.95	2.90	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.44	<u>2.41</u>	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.83	2.85	2.84	
平均			2.81	2.80	2.81	

自己評価が高い項目（4点満点中で平均が3ポイントを超えている）

（平成16年度）

- ・授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。(3.04)
- ・生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。(3.17)
- ・授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。(3.07)
- ・**アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。(3.11)**
- ・生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。(3.04)

（平成15年度）

- ・授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。(3.07)
- ・生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。(3.06)
- ・授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。(3.06)
- ・生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。(3.01)

自己評価が低い項目（4点満点中で平均が2.5ポイントを下回っているもの）

（平成16年度）

- ・研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。(2.33)
- ・リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。(2.43)

（平成15年度）

- ・研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。(2.28)
- ・**自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。(2.51)**
- ・リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。(2.41)

（2）設問毎の分析（参照 別添グラフ）

教育的人間力

		H15	H16
1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。		
2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。		
3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。		
4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をする事ができる。		
5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。		

4、3ポイントの合計が（80%以上 50%未満 ×）

- ・英語の授業をする喜び、生徒理解、授業を考察する姿勢の3点については、昨年度に引き続き効果があったようである。
- ・本年度は、職場の同僚と英語教育のことを話題にすることが多くなっている。これは、本年度の研修対象が東部地域のみであり、全英語科教員が参加したこと、アクション・リサーチのグループを極力同一の学校、同一の地域に設定したことによるのかもしれない。
- ・英語を楽しみながら教えるという率は、全体としてはあまり変化がないが、高校で半減し、中学校で倍増している。

- ・授業や評価について深く考察するという者の割合が、高校で減少している。

英語運用能力

		H15	H16
1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	×	×
2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができる。		
3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。		
4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。		
5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができています。		

4、3ポイントの合計が（80%以上 50%未満 ×）

- ・昨年度に引き続き、英語運用能力が向上したとの実感はないようである。しかし、今後英語力を向上させたいという意志の高まりも、昨年と同様に高い。本研修以降の取組、各個人での取組が重要になる。
- ・英語の授業での英語の使用やインタラクションの機会の確保についても、中学校で大幅に改善がみられ、高校で減少している。高校としては、気になる数値である。

英語授業力

		H15	H16
1	アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。		
2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。		
3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。		
4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	×	×
5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。		

4、3ポイントの合計が（80%以上 50%未満 ×）

- ・アクション・リサーチについての理解が深まったという設問は、昨年と同様に高いが、昨年と比較しても、かなり改善されているようである。報告書を全員配布していたこと、主催者側が研修実施のノウハウを高めたこと、アクション・リサーチについて県内全体に周知が図られてきたということなどが原因であろうか。
- ・生徒の英語力の変化については、中学校で改善されたとする割合が高い。
- ・授業態度の改善については、引き続き良好だが、中学校に比べ、高校で改善されたとする割合が低い。

(3) 自由記述意見のまとめ

アクション・リサーチの意義の理解

- ・アクション・リサーチ自体を知ることができたこと。
- ・自分の授業を客観的に振り返ることができた。
- ・目的意識をもって授業に取り組めた。
- ・計画の段階でだめだと思っていたことも、データを分析してみるとプラスの面がみえてきた。
- ・指導を工夫して、効果を高めてみようと思えるようになったし、結果が楽しみに思えるようになった。
- ・仮説を立てることで、今までとは違ったアプローチが発見できた。
- ・生徒が勉強しないからということではなく、授業の進め方を工夫しなければならないということが大切であると思った。
- ・生徒の能力は潜在的で開拓の余地があることに気づいた。そして、それに負けずと教師も発奮して伸びていく可能性が残されていること。
- ・課題意識、問題意識をもち、それを改善しようと論理的に仮説をたて、後は自分の努力次第でかならず結果が出てくると思いました。
- ・アクション・リサーチのサイクルを繰り返すことで明らかに授業が変わると実感した。
- ・「冰山モデル」「今の生徒をどういう生徒にしたいのか、どういう生徒になればハッピーなのか」という基本という原点にもどって実践することの大切さに気づき考えた。
- ・授業の問題点が明白になった。
- ・一つ成功しても、いつも、どの生徒にも合うとは限らない。常に新しいいろいろなパターンを提供していかなければならない。

計画的、継続的实践

- ・いきあたりばったりの授業ではなくなった。
- ・継続性、計画性の必要性を確認できた。
- ・1年間一つのテーマにこだわって実践できたこと。

意識改革、授業観の変容

- ・自らの意識改革になった。
- ・自分の教え方について、1年間を通して改めて考え、改善の努力をできたこと
- ・授業毎に授業を振り返る習慣がついた。
- ・いろいろなことにチャレンジしたいという意識が強くなった。
- ・教材研究や授業への心構えが前向きになった。
- ・今後の英語教師の在り方を考える良い機会になった。
- ・いかに定着させるかを考えるようになった。
- ・完全なパーフェクトな授業はない。いつも前進しないと。
- ・生徒の分かりたい気持ちを受け止め、意欲を高めていくことの大切さ。
- ・教師が変われば生徒が変わる。

生徒理解

- ・生徒はどんな思いで勉強をしているのか？知りたいと思いつつ、今まで触れないでいた部分を考えて
ることができた。
- ・今までいかに一人ひとりの生徒を余裕をもって見ていなかったか気づいた。

- ・生徒の状態や意識について、より興味をもてるようになった。
- ・学習者の状態を具体的に把握できるようになった。
- ・生徒の顔が良く見え、表情が明るくなった事に気づいた。
- ・生徒の前向きさがうれしい。
- ・生徒の力が高まることを実感できた。
- ・生徒を多方面から観察することができた。
- ・生徒の実態をより深く理解できるようになった。
- ・生徒の求めているものを改めて意識しながら教えることの大切さ。
- ・生徒の状態を常に考える習慣が身についた。

生徒と共につくる授業

- ・授業を変えていこうとする姿勢を生徒に見せることで、共に学ぶという雰囲気が出てきた。
- ・生徒のやる気の一部は教師が「この授業に真剣に取り組んでいる」という姿勢によって出てくるのではないかと考え始めた。
- ・教員の達成感と生徒の達成感は必ずしも一致しないことに気づいた。生徒に上手く達成感を味合わせてあげたい。

同僚性、課題共有、情報交換

- ・他の人、他の学校との情報交換できた。(今年は特に多数)
- ・多様性と類似性を多くの先生方から学ぶことができた。
- ・報告会で、他の先生方と共有できることがたくさんあることが改めて分かった。

達成感、自らの課題を乗り越える意義

- ・実践をレポートに残せた。
- ・仮説の設定など試行錯誤の連続だったが、この経験が大きな収穫だった。
- ・数値データを出す重要性に気づいた。
- ・教えっぱなしではなく、振り返ったり、データを取ったりすることの重要性に気づいた。
- ・多少なりとも成果が現われ、やはり英語の教師は英語の授業で勝負すべきだと思った。
- ・教材研究の大切さを改めて実感した。

文章化することの意義

- ・指導上の課題と手立てが、文章化することで整理され、明確になり、問題を深めることができた。
- ・ポートフォリオとしてまとめ、振り返り改良していくことで、授業改善ができること。
- ・多忙な中大変だったが、簡略化した形ででも、時々文章化してみると良いと思った。

教科の特性

- ・英語という教科も気づきや考えることが必要な教科だということがわかった。
- ・語彙力の重要性に気づいた。
- ・自分自身の英語力を高める必要がある。

改善点

- ・定期的にオブザーバーにアドバイスをいただかないと課題解決ができていないような気がする。
- ・目標設定があいまいだった。一つ一つ段階を踏んでいくことの大切さに気づいた。
- ・リサーチクエスチョンをもう少し絞り込むべきだった。
- ・生徒の実態にあわせてリサーチクエスチョンや仮説の設定の仕方は難しかった。

(4) 担当者の観察・雑感

メンタリングによる参加者サポートは重要

- ・メンタリングは、メンター側からの積極的な働きかけがないと成立しない。
- ・メンターの育成も重要な課題。指導主事だけではなく、経験者の中から、メンターの育成が必要。併せて、職場内で後輩を育てるといった職場文化作りも今後の課題。

メーリングリストの運用

- ・メーリングリストは本年度も上手く活用できなかった。定期的な問題提起、発言を引き出す投げかけが不可欠。

意識改革

- ・自己評価をみると「目指す英語教師像」の中身が徐々に参加者に根付いてきているように感じるが、英語教育の改善、改革ということについての意識にまだまだ温度差があるように感じる。

自己評価と現実

- ・非常にポジティブな自己評価をしていても、必ずしもそれが授業実践とつながっていない場合があるのではないかと。分析的で優れたレポートを残していても、授業はあまり良くないということもあるようだ。自己評価が甘い、そもそも授業の良し悪しに関する評価基準に狂いがある、課題がわかっても改善策を講じられない、などの問題があるのかもしれない。
良い授業や優れたARをたくさんみる経験も必要ではないか。

- ・まだまだ、「定着」という意識が弱いのではないかと。授業に変化があったとの実感は、多くの先生がもてたようだが、それが単なる「変化」なのか、「良い変化」なのか、十分に検証しきれていないように思う。やはり、英語力の定着、向上という点で、望ましい変化がみられるようにする必要はある。

ティーチング・ポートフォリオの充実

- ・ポートフォリオが、真に内省に役立つ内容にすること。

受講年以後のモラルの維持

- ・オリエンテーションの時は、やや硬い、警戒感に満ちた雰囲気であったが、最終日の報告会は、全体的に前向きで、非常に良い感じで終わった。その意欲や意気込みが、持続しているか。本当にこのプロジェクトが今後の教員の成長に効果をあげるか、検証する必要があるだろう。
- ・併せて、やはり、5年間終了後の定期的な力量維持の研修を構想しておくことが必要。

5 まとめ

(1) 平成16年度の成果と課題

【成果】

- ・参加者の多くが、授業改善という点については、本プロジェクトの成果を実感しており、全体的な成果は、昨年とほぼ同様の傾向を示している。
- ・特に、生徒理解に関する項目で効果が顕著であった。
- ・授業改善に取り組み、プロジェクトを完成させることが、達成感を与えている。
- ・アクション・リサーチについての理解が、全体的に広がってきている。
- ・職場内で同僚がアクション・リサーチを行うことは、授業改善に対する意識の改善に寄与する。

【課題】

- ・初期段階でのサポートが最重点課題である。
- ・効果的にメンタリングを行う方法を研究する必要がある。
- ・教科教育に関する専門的知識の向上は、引き続きの課題である。
- ・望ましい変化の捉え方、授業中の英語使用などの意識の点において、高校教員が、中学校教員に比べて十分でない。自己評価の基準が厳しいのか、成果があがっていないのか、検証する必要がある。
- ・授業での英語使用ということについては、継続的に意義を訴える必要がある。
- ・研修終了後に感じた意欲を継続させるための工夫が必要である。

(2) 平成17年度の改善策

平成17年度も、全体の枠組みは継続し、重要な課題について重点的に改善を施していくこととする。

リサーチ初期段階のサポートの充実

【H17 重点】

- ・事前研修課題の分量を減量化 オリエンテーションで活用
- ・リサーチクエスチョン及び仮説設定の段階で、マーキングリストを活用して、サポートを実施する。
- ・指導主事が複数のマーキングリストを担当することと対応する。疑問点が生じた場合は、アドバイザー（佐野先生）に相談する。
- ・オリエンテーションで過年度の優れたポートフォリオを展示（入手可能な場合）
- ・文献研究を促すようにする。

グループ編成の見直し（プロジェクト班 < リサーチグループ）

- ・1プロジェクト班を3～4人とする。
- ・校種、テーマ別でリサーチグループを編成し、リサーチグループ毎にマーキングリストを設置する。
- ・リサーチグループ毎に担当指導主事を決める。
- ・オリエンテーションの受付後の座席をテーマ毎にする。その中で、テーマに応じて班編成を行う。

年間の手順をより明確化かつ確実に伝達

- ・発表の手順、準備する資料などを明確に示しておく。
- ・ポートフォリオの作成についても十分な説明を行う。
- ・レポートの作成方法（誤字、脱字、推敲）、公文書の提出方法なども十分に説明をする。

報告会の改善

- ・中間報告 ポスターセッション 報告会 研究発表形式 は変更なし。
- ・報告会での発表の持ち時間を十分にとれるようにするために、部屋数を増やす。そのため、各部屋の運営は、担当指導主事から参加者に変更。

「定着」意識を浸透

- ・アクション・リサーチにより、授業改善は図られているが、それが、どの程度、生徒の変容や英語力自体の変容につながっているかが十分に検証されていない。年間を通して、「定着」という意識をもちつづけるよう意識を喚起する。

教科教育の専門性・専門的知識の向上

- ・サポートの過程で、他の講義との効果的な関連付け図るように努める。
- ・予備調査段階での、文献研究を推奨する。

その他 留意すること

- ・英語担当指導主事が主体者意識をもち、かつ、協力して「良い雰囲気」で参加者の先生方の自己実現を支援する気持ちをもつこと。
- ・英語力向上に向けての動機付けをさらに高める工夫を。
- ・高校の教員に授業での英語使用を促す工夫をする。

授業改善プロジェクトの達成目標

[目指す英語教師像]

良質の英語を使った授業を展開することができ(REAL English Teacher)、省察によって授業を改善する方法を身につけ(reflective practitioner)、新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員(self-directed teacher)

[授業改善プロジェクトの達成目標と評価の観点]

1 教育的人間力

(教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛)

- 1) 授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
- 2) 生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
- 3) 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
- 4) 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をするができる。
- 5) 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。

2 英語運用能力

(英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施)

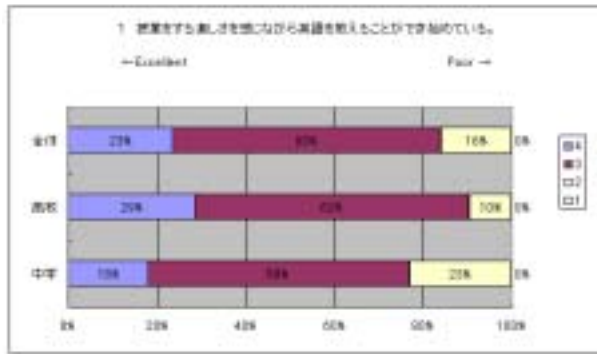
- 1) 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
- 2) 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
- 3) 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
- 4) 可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
- 5) 生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。

3 英語教授力

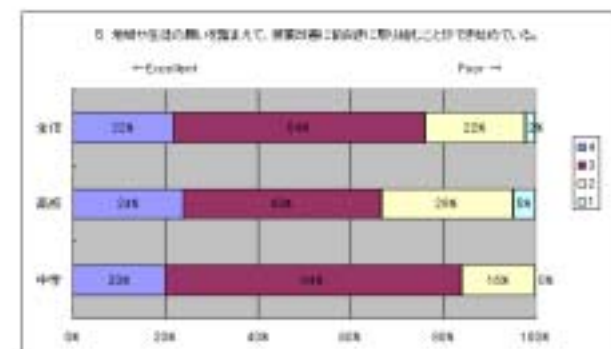
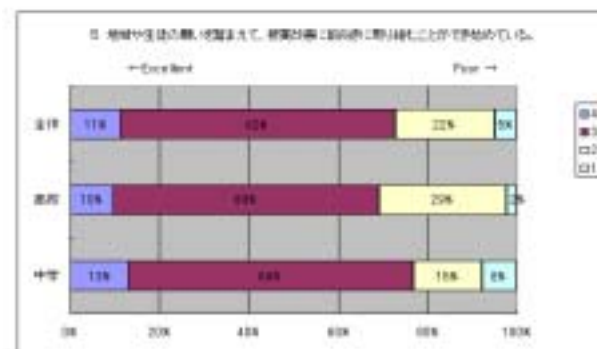
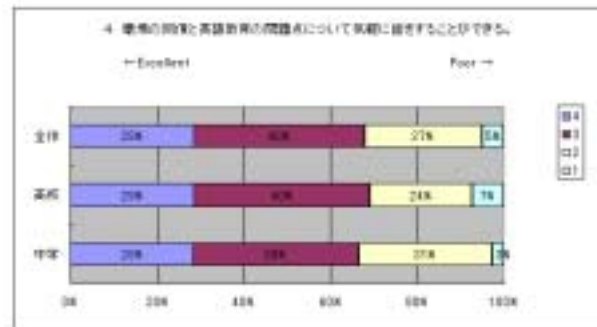
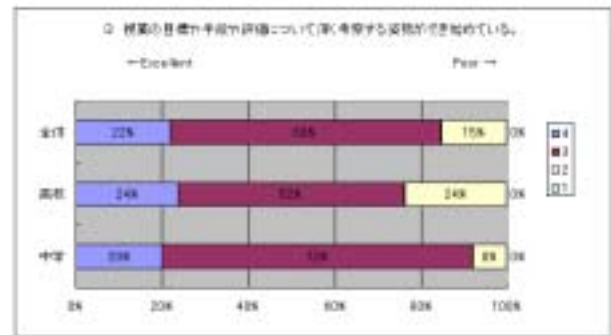
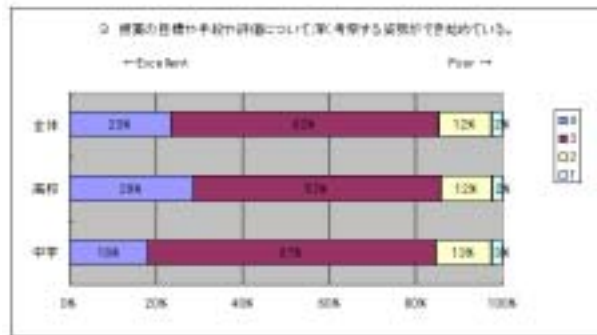
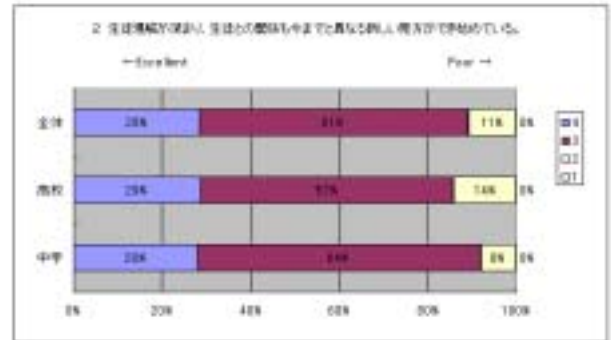
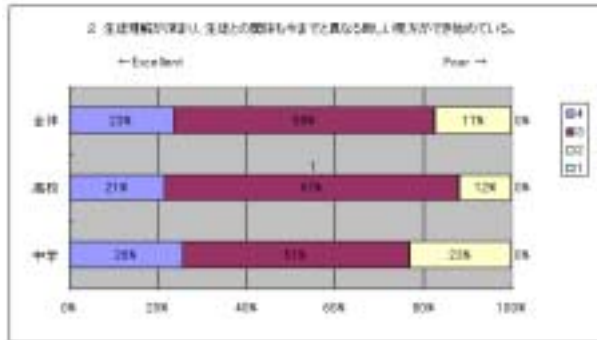
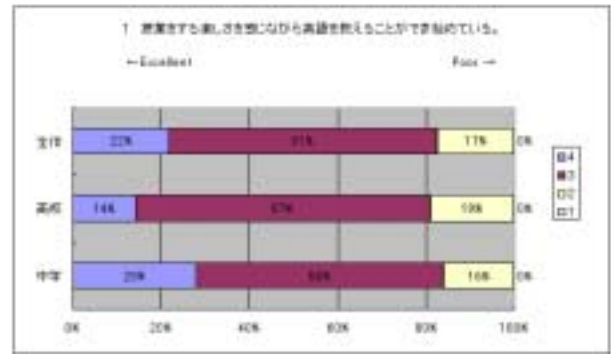
(教科指導に関する専門的知識と技能の向上)

- 1) アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
- 2) 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しが見られる。
- 3) 課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しが見られる。
- 4) リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
- 5) 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。

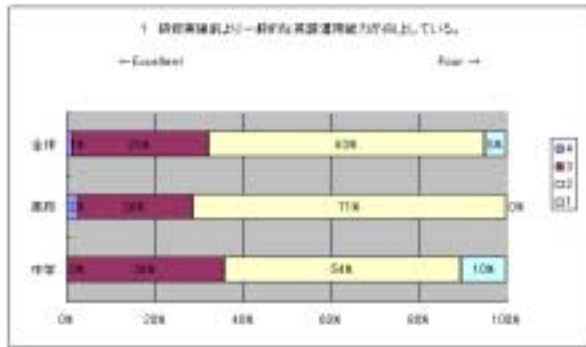
(平成15年度)
1. 教育的人間力



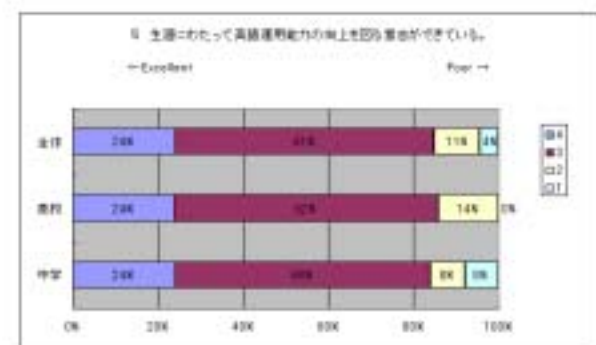
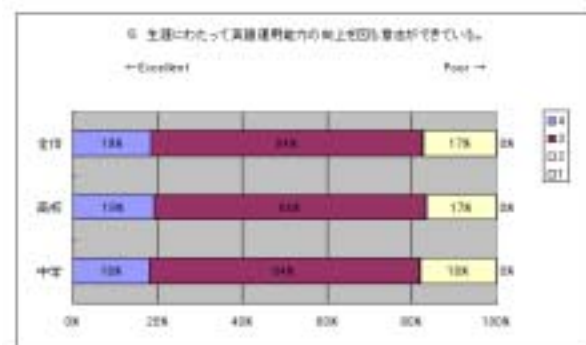
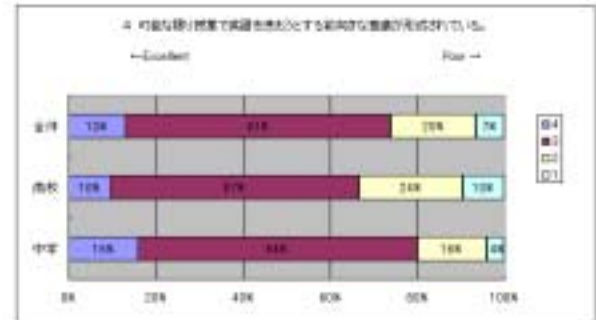
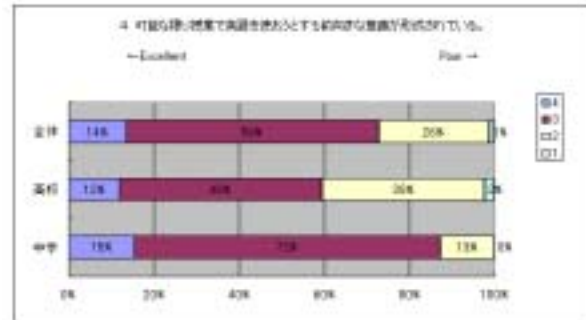
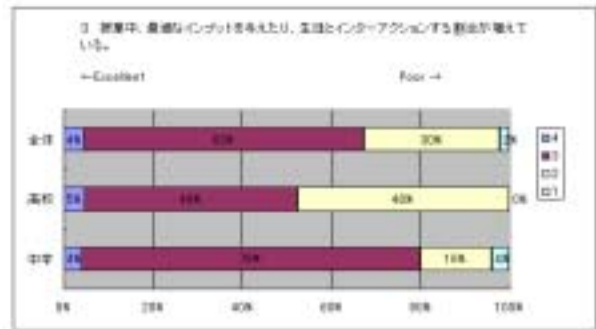
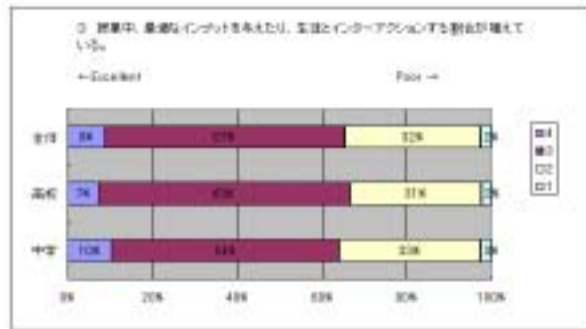
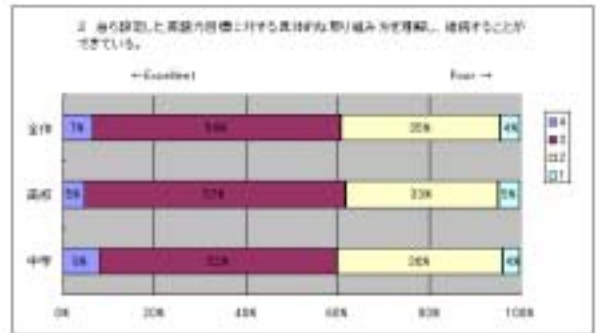
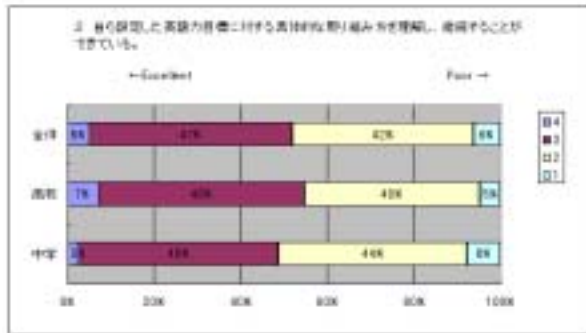
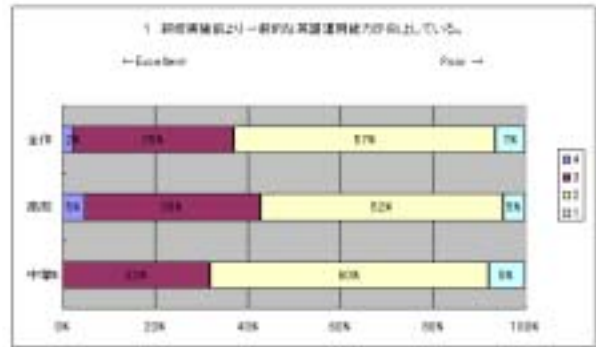
(平成15年度)
1. 教育的人間力



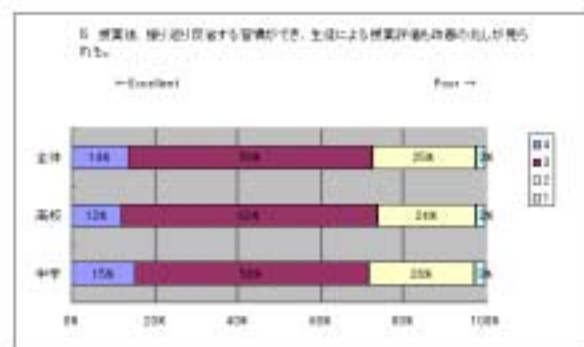
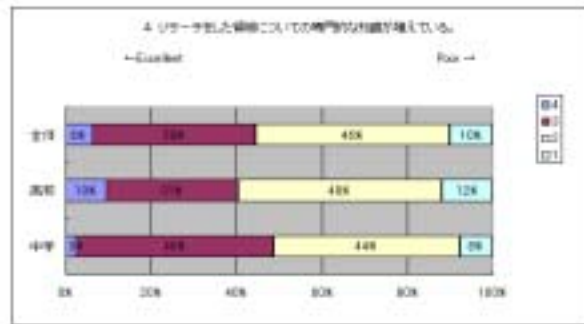
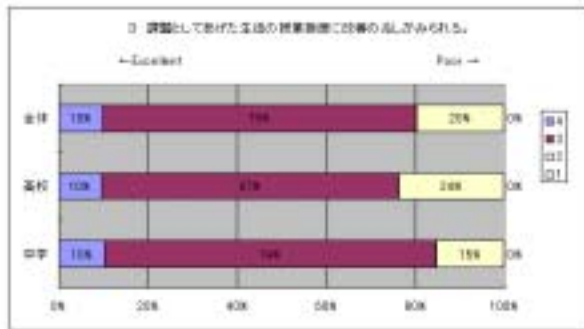
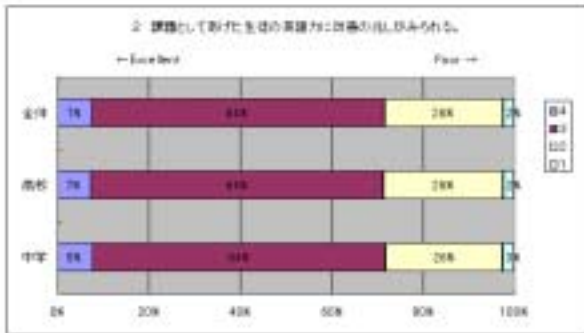
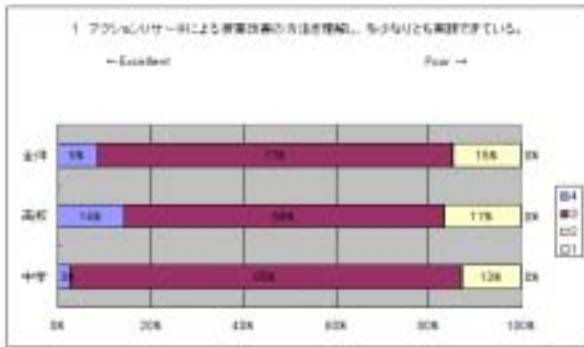
(平成15年度)
2 英語運用能力



(平成16年度)
2 英語運用能力



(平成15年度)
② 英語授業力



(平成16年度)
② 英語授業力

